秀歌三十首十今年の収穫

奥田亡羊

われに過ぎし夏をおもへり梔子の香の濃きうすき夜をゆきつつ　**十月号・横山未来子**

会うたびに面差し変わる父の住む老人ホームの白き一部屋　**田中　拓也**

前文と河野、村山両談話を眠らむために復唱するなり　**坂口　弘**

夕暮れのまだ来ぬときに縮む花 朝顔はいま青を手放す　**大塚　泰子**

誰が過去となる初夏の風きらきらと風鈴市に音たててゐる　**佐佐木頼綱**

戦争がドングリの中に来てゐると幼子はその手をひらきたり　**十一月号・大口　玲子**

百二歳の記憶の暗き海溝に武蔵建造せしこと眠らす　**森川　陽子**

夏雲に差し入るる銀の匙ありや閃きしのち雷ひびきたり　**佐々木寛子**

七十一年目八月十五日八十八歳のわたしの髪あらいておりぬ　**渡辺たつ子**

祖母がいた部屋の障子を次々と開ければざあっと水の引く音　**十二月号・藤原さとこ**

山月記読む教室に時雨ふる四十の虎のこころ濡らして　**一月号・本田　一弘**

亀のゐる川の中洲のちひさきに小波寄り来る四方より寄り来　**柴山　佳子**

夕焼けの空を分ちて引かれゆく飛行機雲の右側をゆく　**塚本　瑞江**

救急車のサイレン過ぎる元旦は賀状をめくりつつとじてゆく　**四月号・大塚　亜希**

土手の上を人ゆらゆらと行きかひぬあはく曇れる元旦の空　**野々宮　雪**

雪匂ふ琴になる木となれぬ木とあれば風受くなれぬ木として　**山口　明子**

頓服の薬ようやく効き始め眠る息子よおかえりなさい　**五月号・中川　弘子**

花びらがうすく積もってひろがれり咲ききってほっと身を解くさくら　**佐佐木幸綱**

良いことが二つ良くないこと一つ名のみの春の夜を眠らな　**細溝　洋子**

山に咲く桜の枝をもらひたり旅人としてわが家にゐる　**六月号・伊藤　一彦**

鉄棒に雑巾のように垂れている五歳の前歯の抜けた暗さよ　**駒田　晶子**

おちこちに波紋たてつつ下り行く稚魚の群追う光の流れ　**小笠原政雄**

人よりも気配やさしくすれ違う霧の中なる水の粒子と　**佐々木寛子**

踏み来たる若き蟻いくつつやつやと初夏の風光るいい朝なのに　**七月号・宇都宮とよ**